

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	(地域レベルでの取組基盤の整備)協働と持続性確保のための枠組み・体制の整備
手法名	コウノトリの再導入による生物多様性保全と地域活性化
主体	兵庫県立コウノトリの郷公園
背景(地域の課題)	野生から絶滅した生き物を再導入するためには生態系復元の観点だけでなく、地域産業の活性化の観点も入れて地域住民等の理解を得ることが重要である。
手法／方策の詳細	<p>コウノトリは、松の木などで営巣し、餌場として田んぼをよく利用していたことから、地元住民にとっては生活域の中の鳥と言えるものであった。しかし戦中から戦後にかけて、営巣木が伐採されたり、農薬による餌の不足から激減し、野生個体が喪失した。昭和35年から始まる長期間にわたる保護の歴史を経て、平成17年試験放鳥が開始された。</p> <p>放鳥においては、生物多様性の回復を基本としながら、コウノトリが住める社会構築を目指した地域の活性化が企図されている。</p> <p>1) 自然再生の取り組み 湿地作り、ビオトープ作り、水田と河川のネットワーク作り(落差等の除去など)、冬季湛水田の実施。</p> <p>2) 農業分野との連携による効果 減農薬や田んぼのビオトープ化を行いながら、生き物と米を同時にはぐくむ取り組みを実施。付加価値を高めて米のブランド化を図っている。平成22年度には800～900トンが出荷予定となっている。</p> <p>3) 観光分野との連携による効果 コウノトリの放鳥を契機にして観光客が増加し、放鳥前の約10万人から一時約40万人にまで増加した。豊岡市では平成17年に環境経済戦略を策定したことにより、古いまちなみの保全、地域固有資源(温泉・海・高原・農村等)の相互連携、安全安心の食の提供、コウノトリの野生復帰に取り組む参加者の交流促進等による「コウノトリツーリズム」を進めている。</p> <p>4) 住民の関心の高まりと地域外住民との連携協働の促進 地域住民と地域外住民がコウノトリの放鳥に関心を寄せることがきっかけとなり、湿地再生のグループができるなど、地域内外にネットワークが作られようとしている。コウノトリを媒介にして、里地里山保全や地域活性化について地域を超えた情報交換と連携活動が促進されている。</p>
手法・技術的視点	里地里山への生き物の再導入は、生態系の回復だけではなく、農家や観光業をはじめとして関わりうる多様な主体の取り組みを活性化したり、当該地域を超えたネットワークづくりに役立つ。再導入を契機に多分野にわたる連携協働の枠組みをもった地域社会を構築することができる。
	 <p>写真 住民手作りのビオトープに舞い降りるコウノトリ (豊岡市のホームページ<a href="http://www.city.toyooka.lg.jp/www/contents/1240548145991/index.html">http://www.city.toyooka.lg.jp/www/contents/1240548145991/index.html</a>より)</p>
参考資料	里なび研修会in広島 兵庫県立大学自然・環境科学研究所講師/兵庫県立コウノトリの郷公園 研究員 内藤和明